

『経済学の冒険』の〈記録〉が〈記憶〉されるために

——栗田書評と塚本リプライの往復書簡——

栗田健一
塚本恭章

当該論説は、塚本恭章著『経済学の冒険——ブックレビュー&ガイド100』（読書人、二〇一三年九月五日、六五六頁）に対する栗田健一氏の「書評」とそれに対する著者の塚本恭章氏の「リプライ」をあわせた共著です。一から五と追記までが栗田、六が塚本の執筆パートです。

〈目次構成〉

- 一. はじめに
- 二. 本書の構成と解説
- 三. 本書の意義

四、本書を読んで議論してみたいと思ったポイント

(一) 生産組織のあり方について

(二) 貨幣研究の視点について

五、おわりに

追記、エピソード「補記」について感じたこと

六、『経済学の冒険』の栗田書評への塚本リプライ

一、はじめに

本書『経済学の冒険』は、経済学史という切り口から現代の経済学者の様々な視点・論点を丁寧に紹介し、多様な経済学の世界を読者に知ってもらおうとする本である。書評という方法を使って経済学の多様性を論じるという本は非常に珍しく、とても斬新な試みである。書評集は雑多でまとまりのないものになりそうだが、本書はそうなっていない。著者の経済学の学び方に対する一貫とした姿勢があることを感じるからだろう。本書を通読すると、経済学の多様なアプローチの必要性に気づき、もっと古典を読んでみようという気持ちになる。経済学をめぐる冒険に一緒に参加してみたい、という思いを強く持つようになるのだ。

標準的な経済学は、冒険は不要と言うかもしれない。ミクロ経済学、マクロ経済学そして計量経済学を学ぶことで経済現象を正確に理解できる、寄り道をする必要は全くない、と主張するだろう。学部生の頃、評者はこの考え方を信じて、盲目的に経済学の訓練を続けてきた。計算を繰り返して、正解を得るという行為を継続す

るのである。標準的な経済学では、問題と解答が十分に用意されているため、それに取り組み解法を理解することが経済学の学びとなる。ところが、そうした学び方を試して継続してみても、経済の仕組みや変動の原理について理解できた、という実感をちっとも持つことはできなかった。大学院で出会った、ポラニー『大転換』やマルクス『資本論』をじっくりと読むことによって、初めて経済現象の本質と意味について考えることができたのである。経済現象を理解するためには、古典に出会い、長い時間をかけてゆっくりと読んでいくという作業が欠かせない。古典をじっくり読むということに時間を費やすというのは、大きな冒険かもしれない。だが、そうした冒険を重ねていくことによって、真の経済問題をつかみ取ることができるようになる。本書を読んでいる、改めてそう感じた。

本書の最大の特徴は、書評という方法を使って、幅広く経済学を学ぶ必要性について論じている点にある。書評は、対象として選んだ本を読み、理解して、まとめるという作業ではない。それだけでは不十分である。本を深く理解するためには、その本が対象として取り上げた本も読んでおく必要がある。経済学で考えてみよう。アダム・スミスについて論じた本を書評しようとするれば、アダム・スミスについても十分に知っておく必要がある。そうでないと、著者の真意や独創的な視点を見抜くことはできないだろう。また、読者に対して、その本の意義を十分に伝えることもできない。だから、良い書評を書くためには、読書によって得られた膨大な学術知識が必要だ。そうした知識の蓄積があってこそ、書評に深みが出てくるのだ。さらに、知識の量だけでなく、本に対する気持ちもとても大切だ。読者が読んでみたい、という気持ちを強く持ってもらえるような書評を書く必要がある。そのためには、本を評する人はその本を好きにならなければならない。本に対する強烈な愛情がなければ、本の魅力を伝えようとする意欲が沸き上がってこないだろう。そうした愛情がみられない書評は、情報のみを伝える薄っぺらなものになってしまいうに違いない。著者は、経済学の膨大な知識を有し、

本に対する深い愛情を持っているため、書評対象とされた全ての本の魅力を引き出し、そしてその魅力を読者に伝えることに成功している。これは驚くべきことで、称賛に値する。どの本に対しても著者の敬意の念が感じられ、読者はその本を一度読んでみたいと強く思うようになる。

私は、これから『経済学の冒険』を評していくが、経済学に対する思い入れが著者ほど深くはないと反省している、少々不安である。だが、『経済学の冒険』が一人でも多くの読者に恵まれて欲しいと思うので、思い切って論じてみようと思う。『経済学の冒険』は大著であるがゆえ、まずは構成や意図などを整理しよう。そして、本書の意義を述べ、議論してみたい点や考えてみたいことなどについて述べる。最後に、もう一度、この本の意義について考えてみたい。

二. 本書の構成と解説

本書は、プロローグ、五つの章と補章、特別編、エピローグ、経済学と世界史との関連性を示した年表、経済学者の人物ガイドから構成されている。章と章の間に挟まれている間奏曲では、読書の意味やアニメーションの魅力などについても論じられており、ここを読むと、経済学の本の書評だけにとどまらない著者の関心の広がりについても知ることができる。一・二名の経済学者の『経済学の冒険』に対する書評が紹介されている点も特徴的だ。それぞれの経済学者が、独自の視点から『経済学の冒険』の意義について述べている。いろいろな経済学者がそれぞれ独自の経済学を構想し発展させてきた、ということもまた知ることができるのである。本書の内容をしっかりと理解しその意義を考えるためにも、まずは、各章の内容について簡潔に説明をしてみようと思う。次に、本書の理解を促す役割を担う年表及び人物ガイドについても簡単に解説してみたい。本の

内容を要約し説明するだけではなく、評者のコメントも適宜加えながら進める。

プロローグでは、この本のねらいと著者の願いが述べられている。この本は、ブックレビューという方法を使った独自の経済学史の学び方や研究の進め方があることを読者に知ってもらい、それによって読者にも自分なりの新しい経済学史を構想してもらおうことを目指している。ヒト、クニ、モノ・サービス、カネ、トキという視点から経済学に関係のある本一〇〇冊を選び評することによって、経済学の多様性と奥深さを知ってもらおう、という斬新な試みである。こうした姿勢こそ、本書の最大の特徴である。この点については、後で詳しくくっきりと述べたい。

第一章「市場と貨幣——経済学の大地にふれる」では、市場と貨幣について論じた本が一〇冊紹介されている。市場と貨幣は、経済学が分析対象とする最も重要な概念であるのは間違いない。しかし、標準的な経済学は、市場や貨幣の役割と意味について深く考えない。標準的な経済学では、貨幣は財・サービスの交換手段に過ぎない。貨幣は交換手段であるのだから、市場における財・サービスの交換を難なく実現するに違いない。この章では、こうした考え方を徹底的に批判する経済学の本が多数紹介されている。どの本も、経済学の分析の中心に貨幣を置くことによって、経済学の刷新を図ろうとしている。ただし、いずれの本も市場と貨幣に対する独自のヴィジョンを持っている。そのため、著者同士の間で、見解の相違や強調点の違いがみられる。こうした経済学者の議論の中で、特に重要な論点となりそうなのが、貨幣の逆説性と貨幣の多様性である。貨幣は必要不可欠なものなのに、社会を混乱に陥れる可能性を有する逆説に満ちた存在であるということ、多様な貨幣が共存することで私たちの生き方を多様化できる可能性があるということ、という視点が経済学の再構築にとって重要になる。これまでとは違った視点から市場を理解する本も書評対象となっている。規制や自由という伝統的な見方から市場を理解するのではなく、デザインという視点から市場を考察する方法と意義について

て論じた本が紹介されていた。この章を読むことで、従来の市場像と貨幣像を超えるための理論や思想が経済学の中で展開され始めている、ということを知ることができる。

第二章「資本主義と社会主義——対立する世界のゆくえ」では、資本主義の課題や社会主義の可能性について論じた本が紹介されている。社会主義は確かに崩壊したが、それは資本主義の全面的な勝利を意味するわけでは決していない。なぜなら、資本主義のもとで貧富の格差が広がっているのは間違いないだろうし、地球環境問題も一層深刻化しているからだ。資本主義が実現する豊かさの意味について、我々はもう一度真剣に考えなければならぬ。では、資本主義をどうするべきか。それを進化させることで、様々な課題を乗り越えていくのか。あるいは、それを乗り越えてしまう新たな経済の仕組みを構想するべきか。著者は、こうした問題こそ、今問われるべきものであると表明している。本章において選ばれた二〇冊は、資本主義や社会主義について論じたものである。ここでは、資本主義の問題、特に新自由主義思想とその政策の推進によって痛めつけられてきた自然環境や労働環境について丹念に考察している本を中心に紹介しながら、資本主義を改善していくための方法やそれを乗り越える経済システムについて論じた本も取り上げている。私たちの経済を良い方向へと導くためのヒントが詰まった章である。ベーシック・インカム、コミュニティ・マネー、新たな所有形態をもとにした市場経済改革等の資本主義に対抗するためのオルタナティブな経済改革や運動について考えることができる。評者が読んでいて特に感動し刺激を受けた書評は、二〇冊目に紹介されている「市場経済と社会主義をめぐる知的格闘——オーストリア学派が選抜した〈経済計算論争〉の主要文献」である。ここでは、社会主義経済計算論争をめぐる、市場像や貨幣像が多様化していく様子が描かれている。著者の卓越した筆致により、この論争の展開過程と現代的意義を明確につかみ取ることができる。論争こそが、市場や貨幣の解像度を上げることができるのだ。

第三章「経済思想と経済学説——競争性と多様性のはざま」では、経済学の学びにおける競争性と多様性の重要性が述べられている。競争と多様な技能に基づく分業が市場にとって必要不可欠であるのと同様、経済学の形成と発展においても、理論の競争性と多様性が求められる。いろいろな経済学の考え方が集合し、互いの意義や正当性を主張し合うことによって、新たな理論が形成されてゆく。そうやって経済学は発展する。それゆえ、一つの正しい経済学を求めることは危険なのである。そうした態度は、いずれ経済学の停滞を引き起こすことになるであろう。本章で紹介される一五冊の本は、これまでの標準的な経済学が意図的に排除してきた重要な経済概念にスポットライトを当てて、経済の見方を多様化しようと試みている。読者は、標準的な経済学が前提とする条件や排除してきた要素について知ることができる。スミスの国富論は、抑制された利己心と分業によって貧困の消滅を目指そうとしたものである（二二二頁）。マルクスは、労働と労働力の明確な違いを分析し労働力商品化による資本主義の機能の在り方を理論化した（二二八頁）。ケインズは、供給それ自身が需要を創り出す「供給↓需要」という考え方を転換し、有効需要が供給を創り出す「需要↓供給」というこれまでの因果関係を反転させた革命的な理論を提示した（二七七頁）。本章で紹介される本は、従来の伝統的な経済学の見方に疑問を投げかけ、新たな理論や思想を構想している。読者は著者の書評を通して、経済学の概念についても一度しっかりと考えてみようという気持ちになるに違いない。

第四章「人間社会と自伝・評伝——勉強と読書のきっかけを掴む」には、経済学者の自伝や評伝に関する書評が収められている。本章を読むと、様々な経済学者の人物像が鮮明になると同時に、彼らの経済学に対する熱き想いにもふれることができる。一流の経済学者ほど、簡単には答えられない重要な問題に真剣に取り組んできたことを知る。「経済学はどのような意義を有する学問か」や「経済成長をどのようにとらえるべきか」といった素朴な疑問は、経済学者こそ持ち続けなければならない。本章は、経済学者としての心構えを教えて

くれる章である。

第五章「経済学の冒険は延長戦へ——ブックガイド40のタイブレイク」では、六〇冊のブックレビューには収まり切らなかつた良質の本を四〇冊選んで紹介している。経済学の本だけでなく、生命科学やテニスプレーヤーに関する本が所収されていることが面白い。著者の関心の多様さを知ることができるだろう。

補章「時代を彩る書物たち——年末回顧号「経済学」(二〇一六〜二〇二二)」は、その年や時代を象徴する書物を取り上げ論評した章となる。この章を読んでみて気づく点は、資本主義が危機を生み出しているということである。論評された本のキーワードを次々と拾ってつなげてみることによって、危機に陥っている時代の様子が見えてくる。経済格差、不平等問題、貧困問題、気候変動、高齢化社会など、現代社会において解決を迫られている問題を扱った本が数多く出版されてきた。補章の中で傑出しているのは、「(二〇二二年・拡大版)資本主義と経済学の未来のために——「経済学的思考」批判の現代的意義」である。ここでは、岩井克人氏による貨幣の逆説性についての詳細な解説を読むことができる。本文と注を合わせて読むことによって、読者は、貨幣から経済学説史を読み解く必要性をはっきりと理解できるようになるだろう。この書評の最後の注においては、西部忠氏による「色貨幣」や「貨幣の制度設計」という斬新な貨幣像についても紹介されている。両氏の貨幣像の紹介を読むことで、経済学の刷新のカギが貨幣にあることが理解できるようになる。資本主義を改良あるいは越えていくために必要なことは、貨幣について十分考えてその本質を理解することである。

特別編「経済学はなにをどのように探究する学問か 著者の〈思考〉を体験する知的冒険の世界」では、根井雅弘『経済学とは何か』(中央公論新社、二〇〇八年)と森岡孝二『雇用身分社会』(岩波新書、二〇一五年)の書評、伊藤誠氏との資本主義をめぐる対談、岩井克人氏の最終講義についての解説が収められている。評者は、伊藤氏の対談から多くのことを学んだ。対談では、社会主義の成果とこれからの社会主義の構想について

議論されており、想像力を鍛えることができる。標準的な経済学では、私Ⅱ市場と公Ⅱ政府によって希少な資源の分配メカニズムが機能するということを学ぶが、共Ⅱコミュニティを支えとするグラスルーツの運動や政策も重要な役割を果たす可能性があるのではないか。コミュニティベースで展開する社会改革運動や政策を組み合わせた新たな社会主義を構想するためのヒントが、この対談から得られるだろう。

エピソード「経済学の次なる冒険をめざして」では、著者の三冊の本との出会いについて語られている。本との出会いは偶然に生じることが多い。立ち寄った書店でたまたま手に取った本に大きな影響を受けた経験を持つ人は多いだろう。しかし、後から考えてみると、その本との出会いは偶然ではなく必然であった、と思うこともあるかもしれない。西部忠『市場像の系譜学——「経済計算論争」をめぐるヴィジョン』（東洋経済新報社、一九九六年）は著者にとって、そうした本の中の一冊のようだ。著者の研究テーマが社会主義経済計算論争であることは以前より知っていたが、卒論執筆後にたまたまこの本に書店で出会ったという事実は少々意外だった。著者がこの本を読んで社会主義経済計算論争に関心を持つようになった、と勝手に思い込んでいたからだ。そこで評者は、改めて著者に聞いてみたくなった。いつ頃、社会主義経済計算論争の存在について知り、なぜ、関心を持つようになったのか。この点については本の中でほとんど語られていないが、「経済学の冒険」を読み解くための一つのカギとなりそうだ。このエピソードからは、研究の進め方についても学ぶことができる。著者は読書だけにとどまらず、著者に会いに行くという行動を起こしている。著者の講義や講演会に参加する、共著論文を執筆する、といったアクティブな行動を起こしてきた。そうやって、著者と積極的に関わることによって、お互いの知見を深めてきたのである。そのようなアプローチは、経済学史版アクション・リサーチである。対象に働きかけ、対象とともに成長していく親密な関係性を築いてきた。そうすることによって、経済学の学びが進んでいくのである。こうした姿勢は、全ての研究者が見習うべきものではないだろうか。

世界史と経済学史の関係について示した「年表」は、都市と貨幣の登場によって経済学が始まった、ということを示している。アリストテレスは、貨幣という現象が社会に与える影響について考え抜いた最初の人物である。だから、彼が経済学の創始者であると考えてもよい。都市国家の発展にとって必要な貨幣が商人の貨殖行為を促し、ついには都市国家を崩壊へと導く可能性がある、という貨幣の逆説を見抜いたアリストテレスこそ、経済の本質的な問題を提示した人類史上最初の人物である。こう主張する岩井氏の視点に立てば、アリストテレスこそ経済学の創始者で年表の最初を飾る人物である。シューマッハーの「スモール・イズ・ビューティフル」が年表の中に入っている点も重要だ。この本は、グラスルーツのコミュニティ経済開発の理論形成と実践に大きな影響を与えてきた。こうした本も経済学の一つとして扱っていることに、『経済学の冒険』の関心の広がりを感じた。

「人物ガイド」はとても充実している。第一章から第四章の注に登場した経済学者と著作について、既存文献に依拠しながら詳しい紹介がなされている。この人物ガイドの最大の特徴は、経済学史の教科書ではほとんど紹介されていない現代の経済学者も多数取り上げていることだ。ホジソンやボウルズといった、主流派経済学とは異なったもう一つの経済学の方向性を切り開こうとしてきた人物についても知ることができる。経済学は完成された学問分野ではない。様々な経済学者がこれまでの経済学を批判し、より優れた理論や思想を提示しようとして現在も格闘中だ。読者は、このガイドブックのページをめくっていくことによって、経済学は統一された理論を提示するものではなく、多様性を有した学問分野であることを知るようになるだろう。

三、本書の意義

では、本書の意義について考えてみよう。第一に、本書が経済学史研究の新たな方向を目標そうとしている、という点を高く評価したい。経済学史という研究分野では、有名な経済学者を一人選び、その人物の思想を様々な資料を活用しながら細かく描写する論文や著作が高く評価される。こうした非常に細かく精密な研究を通して、学派の特徴についての正確な描写が可能となり、対象とした経済学者の位置づけを明確にできる。その意味では、特定の経済学者を細かく正確に理解するという方法が欠かせない。だが、そうした研究の方法が高い評価を受けるようになると、その経済学者をこの時代においてなぜ研究するのか、という社会的な疑問が重視されなくなってしまう可能性も生じてくる。経済学史の発展のための経済学史研究という研究の進め方が広まっていくことによって、研究成果の持つ社会的インパクトが見失われてしまうこともあるのではないか。この問題に対処するためには、私たちは現代経済の様々な現象（貧困、格差等）を社会問題として認識し、その社会問題を正確に理解し解決していくために活用できる経済学史研究という見方を大切にする必要があるだろう。この方向性に基づく経済学史研究では、特定の学派あるいはその学派に属する特定の経済学者に研究の焦点を絞るのではなく、社会問題や現代性を有するテーマという視点から、経済学者たちの理論や思想の対立や継承関係を整理し描写していくことになるだろう。例えば、貨幣は現代性を有するテーマとなる。ここ数年で貨幣に代替するあるいは貨幣と同じような機能を果たす様々な決済・交換手段が登場してきた。そうした、現象を理解するためには、特定の学派の特定の学者の研究を超えて、様々な経済学者の論点の対立関係や継承関係を整理する必要がある。いろいろな見方から新しい貨幣の仕組みについてアプローチすることによって、その特徴や意味が見えてくる。そのためには、従来の学派の整理や特定の経済学者の研究という方法を使うよりも、

貨幣というテーマについての多様な視点・論点を提示していく方が有効だ。なぜなら、そうすることによって議論をより活発にできるからだ。評者は、『経済学の冒険』はこうした新たな視点から経済学史研究を切り開いて前に進めようとしている、と考えた。『経済学の冒険』では、市場、貨幣、資本主義や社会主義といった様々なテーマのもと、いろいろな経済学者の学説や思想を整理している。よく読んでいくと、理論と思想の継承関係や対立関係が見えてくる。テーマ型の経済学史研究アプローチを使うことによって、本書は経済学の多様性を提示することに成功している。読者は、経済学の主要分析概念（市場、貨幣、資本主義、社会主義）について知り、それを分析するための様々な視点や方法があることを理論・思想の継承・対立関係から学ぶことができるに違いない。読者はこうした経済学史のアプローチから、社会問題や現代性を有するテーマに対する様々な接近法を獲得していくに違いない。そうして、興味のあるテーマに関連した様々な経済学者を取り上げ比較しながら自分でも分析してみよう、という気持ちを持つようになるのではないか。この本の意義は、経済学史研究がまだまだいろいろな方向へと展開できる可能性がある、それは現代社会の問題と関連性を有しながらでも進めていくことができる、ということを示している点にあると思う。

本書のもう一つの意義は、社会主義について論じた本を複数紹介している点にある。社会主義の崩壊以降、私たちは社会主義について希望をもって語ることが少なくなった。だが、社会主義の理論・思想について考える必要がなくなったというわけではない。著者が述べているように、資本主義の危機が生じれば、社会主義の可能性について考える必要が出てくるだろう。資本主義経済の機能不全が見え始めてきた現代社会において、重要なことは、社会主義のヴィジョンを多様化することではないか。独裁政治に基づく官僚主導型社会主義経済は社会主義の一つのかたちに過ぎない。社会主義思想や社会運動の歴史を学ぶと、社会主義が多様性を持っていた、ということを知る。著者は『経済学の冒険』において市場や貨幣のヴィジョンを多様化することを目

指しているのと同時に、社会主義像を多様化する『社会主義の冒険』にも挑んでいることがわかる。そのために、社会主義に関わる様々な経済学者の本を評しているのである。読者は、この本を通して社会主義が実に多様な可能性を持っていることを知るだろう。グラスルーツ型の協同組合を中心とする分権型社会主義、市場社会主義、ベーシック・インカムといった、資本主義経済の問題を乗り越えようとする試みが多数紹介されており、社会主義の可能性について多面的にとらえることができる。この本は、市場経済の「市場」をめぐる様々な経済学者のヴィジョンが存在していることを明らかにするだけでなく、社会主義の「社会」についても様々なヴィジョンがあり得る、ということについて書評を通じて示している。社会の見方も様々で、それによって実現する社会主義もまたいろいろとあり得るのだ。市場経済を学ぶ学問が経済学である、という狭い見方を超えて、社会主義を考える学問もまた経済学である、という視点があるということを『経済学の冒険』は教えてくれる。

四、本書を読んで議論してみたいと思ったポイント

本書を読む中で、様々な論点があることを発見した。ここでは、評者が特に関心を持っている論点について提示する。一つ目が、生産のための組織の在り方についてである。具体的には、株式会社と労働者協同組合について考えてみたい。二つ目が、貨幣をめぐる問題である。本書では、岩井氏の「貨幣の逆説性」と西部氏の「貨幣の多様性」という視点が提示されており、両者の視点より学びながら貨幣研究の方向性について考えてみたい。

(一) 生産組織のあり方について

本書では、岩井氏の法人論の意義について詳細な解説を読むことができる。その解説によれば、フリードマンの(一)株主主権論、(二)経営者代理理論、(三)利潤最大化論は全て完全に間違っている。フリードマンが強調するように、会社は確かに利益を最大に追求していくための組織であるが、実は倫理的な義務を果たすべき存在でもある。そうした視点から改めて会社を見ると、現代社会の課題に挑む新しい会社のかたちを構想することができるようになる。著者の「とりわけ鋭く着眼すべきは、資本主義社会において中核的存在をなす『会社』のあり方であり、資本主義という経済システムが本来的にもつ多様性の根源でもある『会社』の新しい形を探究することが、人類と文明と地球環境の未来に向けて欠かせない」(五四二頁)という主張の通り、倫理に着目した会社改革を通して実現される経済革新を構想できるようになるのだ。ここで考察した会社改革による経済の改良は、利潤を際限なく追及することが正しいと評価する資本主義のあり方を軌道修正していく試みとなる。さらに、もう一つの方向を考えてみることもできる。それは、会社とは異なる生産組織を評価し成長させていくという試みである。具体的には、労働者協同組合の可能性を探るということである。労働者協同組合は資本主義を動かす会社組織とは異なった、労働者の自律的な連帯に基づく生産組織である。伊藤氏は著者との対談の中で、労働者協同組合を再評価している。労働者協同組合に基づく新しい社会主義の建設を構想していたようだ。労働者協同組合を中心に考える社会主義は、マルクスも高く評価していたという。

岩井氏の倫理という視点、伊藤氏の労働という視点を組み合わせた、倫理×労働による組織改革が現代社会における目指すべき方向になりそうだ。それによって、格差問題や地球環境破壊問題に対処していく必要がある。具体的な企業改革や労働組織改革が現れ始めている。例えば、Bコープは認証ビジネスを通じて、倫理的な生産活動を行っている企業を選び広めていくという試みを行っている。倫理的視点を大切にする会社によって、

資本主義経済は少しずつ良い方向へと向かっていくであろう。一方、労働者をエンパワーするための新たな組織も現れてきた。労働者協同組合である。それは、(一) 組合員が出資すること、(二) 組合員の意見を適切に反映させること、(三) 組合員が事業に直接従事すること、という三つの点の特徴として持つ。労働者協同組合は、株式会社とは全く違った組織形態を有し、グラスルーツ型の分権的社会主义思想の中で特に高い評価を受けてきた生産組織である。評者はこの生産組織の可能性にとっても興味がある。株式会社改革については、新聞やマスメディアでよく取り上げられ議論されている。最近では特に、SDGsという視点から会社改革が盛んに論じられるようになってきた。だが、労働者協同組合についてはほとんど議論されていない。『はたらくをつくる。みんなでつくる』を合言葉にした労働者協同組合法が、二〇二二年一月一日に施行された。この法によって、労働者協同組合が広まる可能性が一段と高まっている。新しい生産組織が広まっていく可能性について、議論する絶好の機会が到来したと言ってよい。労働者協同組合は、どのような分野で、どの程度の規模で機能するだろうか。民主的な意思決定の利点・欠点はどこにあるだろうか。株式会社に対抗していくために生産性を高めることは可能だろうか。こうした論点から、経済学者は労働者協同組合についてもっと研究を進めてもよいのではないか。そうした研究蓄積が、新たな社会主義を構想する際に有益な視点を与えるのではないだろうか。『経済学の冒険』を読みながら、この問題に取り組んでみたいと強く思うようになった。

(二) 貨幣研究の視点について

本書一章では、市場と貨幣について標準的な経済学とは違った視点から論じた本が多数紹介されていた。その中で、評者が特に注目した本が、六の『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』(岩井克人＋丸山俊一＋NHK「欲望の資本主義」制作班)と七の『脱国家通貨の時代』(西部忠著)の二冊である。どちらの本も、標準的な

経済学ではつかまえることができない貨幣の意味について解き明かそうと試みている。そして、新たな貨幣像を提示している。二冊の書評を読むと、貨幣に対する見方が変わる。ただし、六は「貨幣の逆説性」、七は「貨幣の多様性」という視点を全面に押し出しているため、両氏の貨幣のとらえ方には違いがみられる。これらの書評を読むと、標準的な経済学による貨幣の理解はとても狭いものだ、と思うようになる。標準的な経済学では、貨幣は交換機能を有した、市場での取引を促す媒介手段に過ぎない。だが、貨幣が取引を促進することもあれば、逆に取引を停滞させて混乱を生み出すこともある。また、普遍的な経済学が想定する一つの貨幣が一つの市場を創るという発想を超えて、複数の異なる貨幣が多様な取引を可能にする市場や暮らし方を実現する、という発想もあり得る。貨幣についていろいろな視点から詳しく論じる余地は、まだまだ残っていることは明らかだ。

『経済学の冒険』は、経済現象に対する従来の見方を変えてしまう本の論点を非常に丁寧に紹介しているため、読者の思考を促す役割を果たしてくれる。貨幣についての常識を取り払ってしまい、想像力を発揮しながらその意味や変革の可能性について考えていくことも必要ではないか、というメッセージを発している。評者は、六と七の書評を読むことで、貨幣の機能についても一度考えるようになった。標準的な経済学では、貨幣は四つの機能を持つ。それらの機能が全て備わった手段を貨幣とみなす。しかし、こうした常識から一度離れて、貨幣の機能について改めて考えてみたところ、ある機能の強弱をつける、ある機能を除外あるいは追加する、という方法によって貨幣の特徴を変化させることができるようになるのではないかと考えるようになった。貨幣の蓄蔵性を弱めた貨幣を想像してみる。それは、貨幣の使用を促進し取引を活発にする。戦間期に現れたスタンプ貨幣は、貨幣の機能を弱めたものである。相手からモノを受けることを目的とした交換の機能を弱め、取引と同時に相手に対して何かを贈る機能を強めた性質を有する貨幣を想像してみる。その貨幣を受け

取った人は、別の誰かにその貨幣を贈ろうとするので、次々につながりが形成されるような関係性が生まれてくるかもしれない。現在、国分寺市で流通する「ぶんじ」というコミュニティ通貨には、メッセージを贈るという機能が備わっている。それによって、国分寺市に新たなコミュニティが形成され広まりを見せている。貨幣の機能に着目した研究もこれから重要性を持つようになるのではないか。『経済学の冒険』が取り上げた二冊の本とそれらについて力を込めて紹介した書評から、貨幣を論じるポイントについて改めて考えてみるきっかけを得られた。読者の思考を促す力がこの本には備わっている。

五. おわりに

本書の意義や論点等について、様々な視点から述べてきた。大著であるため、数多い論点を確認でき、経済学にはまだまだ考えるべきテーマが存在することを改めて知ることができた。『経済学の冒険』を読むまでは、評者の経済学に対する興味関心は薄れていた。経済学を学ぶことももちろん大切であると思うが、人類の本質をつかむには人類学、生物学や心理学等の学びがもっと必要である、と思いはじめていたからだ。実際、ここ数年読んできた本は、そういった種類のものが多かった。だが、『経済学の冒険』を読んでいくと、経済学の可能性を感じるようになり、もう一度しっかりと様々な古典を読んでみよう、と強く思うようになった。著者の経済学に対する熱い気持ち、評者のそうした感情を引き起こしたのである。

経済学の学び方が画一化され数理的な思考力が一層求められるようになってきた。特に、経済学の学びには数学の知識が必須である、と言われている。確かに数学の知識は、経済学の学びを進めていく上で必要であろう。特に、ここ数年、経済学ではデータ分析の重要性が強調されるようになり、数学、特に統計学やプログラミング

グの知識が求められるようになってきた。だが、こうした知識によって分析される経済という対象の本質について正確に理解するためには、市場や貨幣について考察するヴィジョンの提示が絶対に必要になる。そうしたヴィジョンがなければ、経済の意味や課題を捉えることができない。分析する道具を持っていても、何が問題なのかを知ることができなければ研究を始めることができない。だからこそ、古典から様々な経済のヴィジョンを学ぶのである。そうすることにより、分析の方法や中心となる課題について議論ができるようになり、課題の発見と研究も進むだろう。古典を読むという行為はかなりの時間を要する。途中、楽しいこともあれば苦しいこともあるだろう。その意味で、それは冒険である。だが、こうした冒険を通じて私たちの認識は広がっていく。そして、私たちの認識の広がりに応じて、経済学もまたより優れた学問へと発展していくのである。『経済学の冒険』は、そうした冒険の必要性を教えてくれる最良の本である。

追記: エピローグ「補記」について感じたこと

本の補記について述べることはほとんどないと思いますが、読みながら涙があふれてきましたので少し書いてみようと思います。「経済学の冒険」は、経済学者との交流の成果をたくさん含んだ大著ですが、著者のお父様との交流によって作り上げられた箇所があります。それは、「人物ガイド」です。「人物ガイド」は、お父様の御助言によって完成したということを知りました。しかし、本書の完成前にお父様がご逝去されたことと記されています。私にも似た経験があります。私が博士論文を執筆している中、父は亡くなりました。突然の出来事だったため激しく動揺しました。父は、私が博士号を取得することを本当に楽しみに待っていたようですが、その思いは叶わなかったのです。深い悲しみの中、気力を振り絞って論文を完成させたことを覚えていますが、著者は、深い喪失感と悲しみの中、「経済学の冒険」の完成に向けて、渾身の力を振り絞って執筆されていた

のではないでしょうか。お父様の理解と献身が著者の支えになっていた、ということを知ってそのように想像しました。「経済学の冒険」は、著者の経済学に対する愛情が存分に示された本です。ただし、それだけではありません。ご両親に対する深い愛情も感じる本です。補記を読みながら二つの愛情によって「経済学の冒険」が完成したのだと感じ、この本をより一層愛おしく思うようになりました。

六、『経済学の冒険』の栗田書評への塚本リプライ

昨年二〇二三年九月五日に出版された拙著『経済学の冒険——ブックレビュー&ガイド100』に対し、東京経済大学の栗田健一さん（本来は、栗田氏ないし栗田先生と呼称した方がよいかもしれませんが、以下の本稿では著者と評者のあいだの親近感を考慮して、「栗田さん」で統一します）が、今回きわめて丁寧かつ詳細な「書評」を書いてくださったので、まずそのことに深くお礼を述べたいと思います。本当にありがとうございます。本来ならば当該書評論考は栗田さんの「単著」として発表すべきですが、当該紀要の規定上、「共著」のみの掲載に限定されうるため、著者のリプライを添えたいと思います。

あらかじめ述べておくならば、『経済学の冒険』が刊行された二〇二三年九月五日以降から現在に至るまで、著者である私は、拙著をめぐる対談（塚本 [2023 c]）や論考・論説（吉川・塚本 [2024 f]、塚本 [2024 b] [2024 c]）、本書に密接に関連しうる著作の書評や経済書の回顧（塚本 [2023 b] [2023 d] [2024 a]）などを引き続き発表してきています（『週刊読書人』紙上での対談、吉川洋先生とは二〇〇九年以来の再会であり、水野和夫先生とは初めての面識でした）。そのこともあってか、栗田さんへの本稿リプライの骨子そのものは、それらのなかにすでにほとんど暗黙的に含まれているのではないかと考えているのですが、ここであらため

て明確に論じ直してみようと思いいちました。「記録」として書き残しておきたいということです。興味関心のある読者は、ぜひ巻末にあげた「関連文献」一覽をご覧いただき、拙著を読む機会、あるいは拙著への理解を深めていただければ、著者としてはこのうえなく嬉しい限りです。

*

栗田さんの拙著への「書評」は本格的なものであり、分量的にも内容的にも見事な仕上がりになっています。すでに拙著には一五本程度の書評が発表されていますが、そのなかでも、最も拙著の内容に踏み込んだ作品のひとつだと思います。とりわけ「書評」というものは、当該評者のスタンスや境地・精神、本書への距離感が端的に映し出され、書評対象の本に純真かつ誠実に向き合う心構えが何よりも求められます。そのような側面からみても、練り返しになります。栗田さんによる拙著への「書評」は素晴らしい筆致で書かれており、読み手になった私自身、拙著のもつ意義や特徴などをあらためて教示していただくことができました。

本書は、著者である私が一年以上に及んで書き続けてきた「書評」をあらためて一括して「一書」にまとめあげた作品であり、私自身としては「単なる書評集」にとどまらない学術的意義をもつものにできないかと執筆中から思案していました。そのための様々な「工夫」については栗田書評に明記されています。「本を読む」と同時に「本を評する」（書評を書く）、これらを実践してきた私自身の一つの成果であり、少しきどった表現をすれば、本を読むことを日々の授業で推奨している大学教員の学生諸君に対する「証明（書）」でもあると思っています。もちろん本書は書評集の決定版でもなんでもありませんので、本書で取り扱っていない、それこそ数多くのテーマについては別途の入門書なり専門書を参照していただければよいと思います。あるいは本書に啓発されて、新たな主題にもとづく書評集が今後刊行される日が訪れるかもしれせん。

本書のそうした狙いをまさに的確に指摘しながら、評者の栗田さんは、いわゆる伝統的で標準的な人物型・

学派区分型ではなく、「テーマ型の経済学史研究アプローチを使うことによって、本書は経済学の多様性を提示することに成功している」との評価をしてくれています。本書全体に対しては、「書評対象とされた全ての本の魅力を引き出し、そしてその魅力を読者に伝えることに成功している。これは驚くべきで、称賛に値する」という評価をも与えてくれています。さらに付言すれば、栗田さんは、『経済学の冒険』を読むまでは、評者の経済学に対する興味関心は薄れていた」が、『経済学の冒険』を読んでいくと、経済学の可能性を感じるようになり、もう一度しっかりと様々な古典を読んでみよう、と強く思うようになった。著者の経済学に対する熱い気持ち、評者のそうした感情を引き起こしたのである」とも回顧されています。これほど嬉しくありがたい評価はないのではないでしょうか。

*

上記の観点から議論を少し推し進めれば、『経済学の冒険』は、栗田さんのような経済学という学問を専門としてきた一研究者に新たな「経済学の可能性」の息吹を吹き込むことができたならば、それは本書が、それなりの専門性や学術性を有していることの証左といえるでしょう。栗田さんは、拙著を担当講義や演習系のゼミなどで学生に「推薦」してくれたそうです。いうまでもなく拙著は、「経済学という学問の専門家」を一読者対象にはしていますが、実際のところ拙著の冒頭で私は、「経済学という学問の扉を開ける」と述べており、むしろこれから大学で経済学を勉強することになる高校生や、すでに今現在、大学にて勉強している（経済学部）学部学生をこそ主たる読者のターゲットにしているのです。

刊行後、さっそく私自身は、秋学期の「経済学史」と「社会思想史」の講義系授業、「基礎演習」やゼミなど演習系科目で、本書をテキストないしは参考書として指定してみました。「指定」された以上は購入しないといけない（！）ということで、多くの学生は素直にに応じてくれたようです。ところが拙著は六五〇頁をこえ

る大著であり、これまでにほとんどみずから読書した経験がない学生諸君からすれば、本書の「読破」は途方もない「難作業」に映ったことでしょう。専門書を多く扱ってはいますが、新書や話題書など、学部学生にも十分に理解可能な本もラインナップされています。「書評」集ですから、好きな箇所から読むことができるし、「今日は五冊の書評を読もう」というようにメリハリをつけて段階的に本書を読み進めていくことだってできるのです。ところが「辞書」のように分厚い大著という時点で、すでに「読破」しえない壁に直面したかのような心境になってしまう。そもそも「活字」に疎い学生諸君には読書という知的行為はなかなかの厳しさを含んでいるのです（とはいえ、昨年度、『経済学の冒険』を「読破」した学生が一名おり、A4で一枚という短い分量ながら簡潔な感想・コメントを提出してくれました。その文章は、私にある種の「感銘」を与えるものであったことをここで明記しておきたいと思えます。その学生がいうには、「本書からは、伊藤誠先生や岩井克人先生などから塚本先生へと脈々と引き継がれてきている学者や教育者としての精神、学問に対する誠実さや倫理性というものを強く感じ、そのことが最も強く印象に残っています」とあったのです。『経済学の冒険』の内容そのものをこえて、本書の基本精神を読み抜いたものとしてきわめて尊いのです。このことを後日、帯推薦を書いてくださった岩井先生にメールでお伝えしました）。

これ以上は上記の点について深掘りしませんが、栗田さんのようにすでに経済学という学問を専門とする研究者にとどまらず、これから経済学という分野を学んでいこう、そして学んでいきたいと考えている学生諸君への『経済学の冒険』の浸透こそが、今後の課題のひとつといえるでしょうか。数時間で読める「お手軽な本」がたくさん刊行されていますが、そういった本は概して「残らないだろう」と私は思っています。そのような本を一〇冊読むくらいなら、多少難しくてもしっかりと読んだ深い見識にもとづいて書かれた本を一冊選んで、時間をかけてじっくり思考しながら読むほうが記憶に残り、力もつくのです。次に別の本を読んだときにも、

その力は間違いなく活かされるはずで、「お手軽な本」というのはまたすぐに刊行されるので、あつという間に賞味期限が来てしまい、人々と世間からも忘れられていく。「売れる」だけを目的とした本は大学図書館に所蔵されることも少ないのが現状です（『経済学の冒険』はゆうに三〇〇大学所蔵をこえています。大学教員が刊行した学術書は、大学図書館のなかに所蔵され続けることで、世代をこえて読み継がれていく可能性を残していけるのです¹⁾）。

*

栗田さんは、現在の大学における経済学教育カリキュラムの中核的存在をなしている標準的経済学（ミクロ、マクロ経済学や統計学・計量経済学）を学んではみたものの、それによって「経済の仕組みや変動の原理について理解できた、という実感をちっとも持つことができなかった」と述べています。これはまさに実直な見解にちがひありません。大学院でのカール・マルクス『資本論』やカール・ポランニー『大転換』のような古典的名著に出会って、初めて「経済現象の本質と意味について考えることができた」のです。古典的名著のような「本物の書」に出会うことができれば、経済学という学問の面白さと奥深さを実感できることでしょう。どんな分野であろうと、時間と労力をかけてみずから試行錯誤しながら思考して掘んでいくのが「学問」なのであり、なにもせずして天から降ってくるはずがない。そうした体験をすでに得ている教員が、「本」をつうじて学生諸君にどう語り続けるのかというテーマが浮かびあがってきそうです。一言でいえば、学生諸君にこそまさに「経済学の冒険」に挑んでもらいたいということです。それは決して不可能ではありませんし、この点で、栗田さんと私の見解は完全に一致していると思います。

*

栗田さんは、本書の「エピソード」である「経済学の次なる冒険をめざして」の内容を紹介するなかで、こ

ここからは「研究の進め方についても学ぶことができる」とし、本書での私の研究方法を「経済学史版アクション・リサーチ」と称されています。いうまでもなく「書評」という知的行為そのものが主体的な「アクション」であり、本の存在を知らない読者に、著者に代わって第三者的な評価をくわえて紹介するものです。書評とその評者は、いわば書評本の著者と読者を繋ぐ「媒介」にほかなりません。私自身、書評している当該本の著者に「褒めてもらう」ような書評を書こうと思っただことはむしろ一度もなく、あくまでみずからの知的関心に則って、広く一般読者とも共有してみたい内容や論点をしっかり紹介することこそが最も重要な心構えでした。「書評」の手ほどきを受けたわけではありませんが、二〇〇九年以降に一般紙に寄稿し始めた頃の私は、故青木昌彦先生（スタンフォード大学名誉教授）、栗田さんの北海道大学大学院時代における指導教授の西部忠先生（北海道大学名誉教授、現在は専修大学経済学部教授）の「書評」をじっくり読んで研究しました。青木先生には「書評」について、メールで助言をいただいたこともありました。

私自身が長く「書評」を書き続けることができた最大の理由は、本を読み、書くことが好きだったことがあるはずですが、それ以上に、本というものは「一度読めば理解できる」ようなものではけっしてないからです。「本物の本」とはそういうものです。逆にいえば、一度読んで簡単に理解できてしまうような本は、その程度のものである可能性が高いのではないのでしょうか。当然といえば当然です。そのことを私が最も強く実感しえたのは、岩井克人先生による一連の書物にほかなりません。私は、二〇〇四年冬学期の東京大学での岩井先生の「経済学史」を聴講する機会を得ました（三〇歳になる直前であった私は、日本学術振興会の特別研究員PDとして、伊藤誠先生を受入指導教授とする國學院大學での研究がスタートしていました）が、東京大学大学院経済学研究科の研究生としても在籍する許可を得ていたからです。岩井「経済学史」講義を拝聴しながら、これまでに自分が「理解」していたはずのレベルとは大きく異なる授業内容を突き付けられ、理解を深めていく喜び

と同時に、自分自身の理解不足にもいささか落胆していました。そして授業後にはほとんど毎回、岩井先生に質問させていただくようになっていました。

ここで何を言いたいのかということ、それから二〇年を経て私が二〇二四年一月に五〇歳になった今でも、まさに「その状況」は続いているということなのです。「理解」を深める知的営為（ないしは知的「冒険」といったほうがより正確かもしれません）は、現在進行形であるのです。岩井理論や岩井「経済学史」講義への知的関心は、私のなかで減退することなくむしろ高まり続け、岩井先生の『経済学の宇宙』（日本経済新聞出版社、二〇一五年、「補遺」を含む文庫版は二〇二一年）を契機として、より内在的で構造的な理解ができるように何度も何度も当該著書を中心としながら、岩井先生の書物や論文、対談などを熱心に読み込みながら理解を深めていった（いる）自分がいるのです。その過程で、栗田さんが呼称された「経済学史版アクション・リサーチ」に対応するとみなしてよいのか、岩井先生にはそれこそ本当に信じられないことであり、こうしたなかから、書物などでは直接的には得られない知見や思考をご教示いただくことができました。岩井理論や岩井「経済学史」についての論考を書き続けることは、「貨幣」や「法人」、そして「資本主義」について思考し続けることにはかならず、岩井先生の『欲望の貨幣論』は二〇二〇年の刊行後、私のすべての講義系科目のテキストに指定しています⁽³⁾。こうして私は、「本」をつうじての「人」との知的な交流を続けることができたことを本当に喜び、感謝しています。「本脈」が「人脈」を形成するのです。

五〇歳になった私は、本年の二〇二四年三月二十九日号「週刊読書人」の紙面で、「岩井論」についての論考を発表しました（塚本 [2024 d]）。そして二〇二四年五月号の『科学的社会主義』誌において、伊藤誠先生の遺著『資本論』と現代世界——マルクス理論家の追憶から』にもとづく論考を発表しました（塚本 [2024 e]）。

二人の偉大な先生については、これまでに書評や論考、追悼など多くの文章を私は発表してきましたが、上記の二つの論考がこれまでに書いたものなかで最も優れているのではないかと、自分自身でそう思っているのです。「読み続けてきた」だけでなく「書き続けてきた」こと、これこそ五〇歳になった今あらためて強く実感できる大きな成果なのです。いや、むしろそのことの重要性そのものを、私は二人の偉大な師から明確に学び取っていたのだと思います。

*

私が知的影響を受け続けているもう一人の研究者は、栗田さんの指導教授でもあった西部忠先生です。『経済学の冒険』では、西部先生の『市場像の系譜学——「経済計算論争」をめぐるヴィジョン』（東洋経済新報社、一九九六年）を第一章、したがって拙著の最初のブックレビューとして取り上げています。栗田さんは書評のなかで、著者は「いつ頃、社会主義経済計算論争の存在について知り、なぜ、関心を持つようになったのか。この点については本の中でほとんど語られていないが、『経済学の冒険』を読み解くための一つのカギになりそうだ」と述べています。社会主義経済計算論争については拙著でもそれなりの分量で論及していますが、具体的に「いつ頃」と聞かれれば、慶大の大学三年次ゼミをつうじてでした。

拙著に所収されている「卒論と本とわたし」と題された「間奏曲Ⅰ」にもあるように、その当時に私が所属していた慶大ゼミは卒論テーマ選定をかなり早くからおこなっており、三年次の時点で何度か卒論の中間報告をする機会がありました。三・四年次合同でゼミは実施されており、先輩ゼミ生からの忌憚なきコメントや批判を受けることになります。「資本主義」をこえるという目標を掲げて人類がめざした「社会主義」経済システムが行き詰って破綻したことに興味があった私は、このテーマで卒論をぜひ書いてみたいとゼミに入った当初から考えていました。とはいえ、近代経済学の古典やカール・ポパーの社会科学方法論のテキストなどを論

読していたゼミにおいて(三年次の最初に読んだのが、シュンペーター『理論経済学の本質と主要内容』とホバー『開かれた社会とその敵』でした。夏のゼミ合宿でシュンペーターの『経済発展の理論』を輪読しました)、マルクス経済学や社会主義について別途に勉強するというのはそれ相応の勇気があることでした。「社会主義」という研究テーマを「マルクス主義」のようなイデオロギーと混同せずにいわば科学的に取り組むことが可能な方法を探っていくうちに、オーストリア学派のミーゼスやハイエクによる「社会主義存立不可能論」と近代経済学の経済理論(ワルラス理論ないし新古典派一般均衡理論)を援用して「社会主義存立可能論」を支持したオスカー・ランゲらによる「論争」を知りました。テーラーとランゲの『計画経済理論』、ハイエクの『個人主義と経済秩序』(ハイエク全集第三巻)や『市場・知識・自由』などに出会って、そこから社会主義経済計算論争を支柱としながら、W・ブルスの分権的・機能的社会主義モデルの試みに注目し、なんとか卒業論文の骨格が固まっていたことを覚えていきます。『経済セミナー』(一九九一年)に掲載されていた、その当時は和歌山大学経済学部の助教授であった尾近裕幸氏による二本の論文「社会主義経済計算論争の意義(上・下)」を読み、現代オーストリア学派の再生という動きがあるなかで、ドン・ラヴォアやイスラエル・カーズナーらによって当該論争が再解釈され始めていることも学部ゼミ時代に知りました。

社会主義経済計算論争についての本格的な研究はまだ日本ではほとんどなかった頃で、伊藤誠先生の『現代の社会主義』(講談社学術文庫、一九九二年)や『市場経済と社会主義』(平凡社、一九九五年)がその先駆的存在だったと思います。そして、私が大学を卒業する直前の一九九六年三月に西部先生の著書が刊行されたわけです。そのときの印象というか衝撃は今でもはっきり覚えていますが、西部先生の『市場像の系譜学』を初めて読んだときは「その狙いがよく理解できなかった」ということに尽きます。学部学生の私にはあまりにレベルが高かったのだと思います。滋賀大学の田中英明先生が、「あの本で、西部さんは社会主義経済計算論争

そのものをやりたかったわけではないからね」と、のちに教えてくれました。「間奏曲1」で述べたように、西部先生の著書と出会った直後の一九九六年四月から、慶大の経済学部「社会主義経済論」の非常勤講師として伊藤誠先生が来られることになりました。そのときはまだ面識のない西部先生のことを初めてお聞きしたのも伊藤誠先生でした。「西部君はこの本で一仕事終えたね」と、伊藤先生は笑顔で応じられました。こうした一連の交流のなかにも、本脈と人脈が同時に貫き流れているのだとあらためて感じているところです。

*

栗田さんは拙著の第二章「資本主義と社会主義——対立する世界のゆくえ」の内容を紹介するなかで、「論争こそが、市場と貨幣の解像度を上げることができるのだ」というじつに的確な指摘をされています。いうまでもなく社会主義経済計算論争は、「社会主義」の存立可能性をめぐって争われたのですが、それをつうじて、まさに経済学の大地ともいえる「市場」像や「貨幣」像の内実とそのあり方へと大きく射程を拡げながら、特殊な問題群をこえた一般的な問題群を浮かび上がらせたこと、ここにこそ当該論争の今なお大きな現代的意義があるのだと考えられます。

西部先生はランゲの「集中的市場」に對比して、ハイエクの「分散的市場」を中核に据え置く重要性を説きながら、その「分散的市場」を可能にする「貨幣のあり方」を再考され続けています。けれども、新古典派経済学者の多くは、ハイエクの意義（たとえば彼の一九四五年の「社会における知識の利用」という論文）を認めながらもそれを「新古典派経済学」のなかに包摂する思考で捉えているため、実際のところ、ハイエク理論のもつ独自性は十分に理解されていないともいえるのです。そのことの論理的帰結は、ハイエクの「分散的市場」の過小評価であり、「集中的市場」に批判を付しながらも、依然として経済理論のコアにそれを据え置くという方法論を堅持することにほかなりません。マルクス経済学の理論家によるハイエク理解についても、新

古典派経済学者と同じことがいえるかもしれません。新古典派、オーストリア学派のハイエク、そしてマルクス経済学の理論的關係は、二〇世紀の社会主義経済計算論争での主要学派をなしたのですから、現代から当該論争を問い直す意義は廢れていないのです。二一世紀的な見地からみれば、当該論争を突き抜けていくような研究がより求められているのではないのでしょうか。二〇世紀の経済思想にはケインズ主義、社会主義、新自由主義（自由放任主義）の三つがあったけれども、そのいずれもが重大な問題を内包していることが実証された今日、こうしたトリレンマに直面し続けているわれわれ人類はどうすればよいのか、新たな経済思想をどう生み出していけばよいのかが問われているわけです。伊藤誠先生や岩井克人先生、西部忠先生の鮮烈な問題意識は、まさにそうした形で定式化できうと思われまます。

栗田さんは『経済学の冒険』を評価して、それは「市場や貨幣のヴィジョンを多様化することを目指しているのと同時に、社会主義像を多様化する『社会主義の冒険』にも挑んでいることがわかる」と主張されています。「社会主義の冒険」という表現が適切かどうかはひとまず措くとして、現代における主流派的潮流はプランコ・ミラノヴィッチが唱えているような「資本主義だけ残った (Capitalism, alone)」という認識でしょう。「資本主義」はいかなる危機があるうともそれを取りこえてきたのだから、もはやそれに代替しうる経済システムは存在しえないということでは。「社会主義の再冒険」ないしは「社会主義の再挑戦」が理論的にも現実的にも可能であるためには、資本主義が直面し続けている危機の根源が本当に「資本主義」以外の新たな別の経済システムでなければ克服できないものであるのかを、しっかり見極めることでしよう。経済学という学問が「市場」や「貨幣」、それらにもとづく「資本主義」を主たる考察対象とするのをこえて、より広く大きな射程をもつ「社会主義」の新たな可能性をも念頭に据え置くことに私は全面的に賛成です。

*

上記での論述内容は、栗田さんの指摘されている「本書を読んで議論してみたいと思ったポイント」とも密接に関連しています。「資本主義的営利企業（株式会社）」とは異なる生産組織としての「労働者協同組合」の可能性に栗田さんは着眼されているのですが、そのことは、いわゆる「二階建て構造」論からなる岩井先生の法人・会社論において、「モノとしての会社」（二階部分）の所有者である株主がまったく存在しえない、純粹に「ヒトとしての会社」（一階部分）として存立するNPO法人の潜勢力に光が当てられていることにも対応する見解ではないでしょうか。岩井法人論は資本主義における会社システムのもつ本質的な多様性を解明するものであり、「岩井氏の倫理という視点、伊藤氏の労働という視点を組み合わせた、倫理×労働による組織改革が現代社会における目指すべき方向になりそうだ」と栗田さんは強調されています。岩井先生はあくまで資本主義システムの枠内での「倫理」を重要視する「信任社会」化のあり方を志向されているのに対し、伊藤先生は最終的に資本主義システムを脱却する「二十一世紀型社会主義」（二十世紀のソ連型国家社会主義に対峙しうる市場社会主義や民主的計画経済など）の多様なあり方の可能性を志向されているというはつきりとした違いはあるのですが、両氏はともに自由放任主義ないしは新自由主義的グローバル資本主義の内的矛盾を批判している側面では完全に一致しているのです。そのような観点からみても、「倫理×労働」というポイントは重要な位置づけをなすと考えられます。新自由主義にもとづく資本主義的競争原理がよりいっそう強化され、働く人々の生活基盤が顕著に毀損されてきているなかで、営利法人としての株式会社とは異なる会社形態が一定規模で存立し続けることができるならば、その二十一世紀的な理論的・現実的可能性を探究していくことも欠かせない試みになるはずです。こうしたテーマに大きな学問的関心をもつ、栗田さん自身の研究の進展にも期待を寄せたいところです。

*

二つめの、「貨幣研究の視点について」をつうじた栗田さんの指摘も、けっして見逃せない現代的意義をもつものです。貨幣論を主要な研究テーマのひとつとしてきた岩井先生が「貨幣の逆説性」、西部先生が「貨幣の多様性」を説いているとし、栗田さんは、『経済学の冒険』第一章「市場と貨幣——経済学の大地にふれる」の要約をされるなかで、そのことについて、「貨幣は必要不可欠なものなのに、社会を混乱に陥れる可能性を有する逆説に満ちた存在であるということ、多様な貨幣が共存することで私たちの生き方を多様化できる可能性があるということ、という視点が経済学の再構築にとって重要となる」ことをとりわけ強調されています。

いうまでもなくこのような論点提起は、主流派の新古典派経済学における「貨幣」の捉え方の狭さを炙り出すものであると同時に、「貨幣」を経済理論のコアに据え置けない主流派経済学は、実際のところ、「資本主義」についてもけっして十分な考察を与えていないことをあらためて議論の前面に押し出すものでもあります。岩井先生によれば、貨幣こそが共同的束縛から人間というものを解放し、まさに近代社会における人間の「自由」に基礎を与えうるものであること、さらにいえば、じつは貨幣というものは、人間社会に存在する「もっとも純粹な投機」にほかならないのです。貨幣に基礎を置く資本主義社会が、貨幣のバブル（恐慌）や貨幣のパニック（ハイパーインフレ）などの「危機」を本質的な不安定性として内包しているのは、こうした洞察の必然的かつ論理的帰結です。岩井先生が重要視されている「自由と安定との二律背反」と栗田さんが指摘されている「貨幣の逆説性」は、有機的に関連し合う内容であるのです。

古代ギリシャのアリステレスが見いだした「貨幣の逆説」をこそ、岩井先生は「人類史上最大の発見の一つだと思っています^③」として、高く評価されています。アリステレスによるその洞察は、約二三〇〇年後に現代のケインズに引き継がれました。こうした理論問題の意義をよりいっそう明確にするためには、われわれは、「経済学史」の方法とそのあり方そのものを深く問い直す必要があるのです。一言でいえば、経済学ないし経

経済学史は、「貨幣」と「資本主義」をこそ最重要論点として解明する学問であることを明確に再認識することであり、その最良の成果が岩井「経済学史」にはかならないと私は考えているのです。栗田さんの先の指摘に立ち返るならば、岩井先生の「貨幣の逆説性」と西部先生の「貨幣の多様性」という貨幣研究の各々のスタンスの理論的関係を再考することは、両氏の「ハイエク評価」に帰着することになるといえるでしょうし（二人によるハイエク『貨幣発行自由化論』に対する評価はまさに一八〇度、真逆であるからです）、結局のところ、「貨幣とは何か」という最も根源的な問いに還元されるでしょう。西部貨幣論の特質とその射程などについての詳細は、彼の『脱国家通貨の時代』を中心としながら、西部先生と共同論文を書く予定であることを申し添えておきます。

以上、栗田さんによる『経済学の冒険』への書評を読み進めながら、著者である私自身、その内容に大いに触発されました。その触発に身をゆだね、私なりの率直なリプライを書き綴ってみました。あまり学術的な論述になっていないかもしれませんが、本稿の冒頭で言及しておいたように、今はこれを「記録」として書き残しておくことが私には大切であると感じているのです。このリプライが今度は、私と栗田さんとの新たな本脈と人脈の形成に寄与することを願ってここで筆を置きたいと思います。最後に、書評の労をとってくださいました栗田さんにはあらためて心から感謝申し上げます。ありがとうございます。

注

(1) 栗田さんは、『経済学の冒険』の「エピソード」補記についても当該書評の最後で言及されています。そこには本書の執筆中に私の父が他界したこと、そして栗田さん自身も、かつてみずからの博士學位論文執筆中に父親の死去に遭遇したことなどが、簡明な文章ながら私の心中を察するきわめて印象深い筆致で綴られています。この箇所は、評者である栗田さんの本当に良き人格者の側面を垣間見ることができます。一言だけ述べれば、九月以降になって父の死が迫るなか、当然のことながら完成稿にむけた本書の作業は中断を余儀なくされ、葬儀などが終わって自宅に戻った二〇二二年一月一日、私はとにかく「本書を前に進めよう」と決断しました。いや、決断するしか道はありませんでした。それ以前からいるんな先生に励ましのお言葉をかけてはいただいていたのですが、現実には、なかなか気持ち切り替えることが難しく、そのまま本書は頓挫してしまいう可能性すらあったかもしれません。だけど今は何も考えず、「本書を前に進めることだけに集中しよう」、そう私は誓いました。時計の針がふたたび動き出すまさに最初に筆をとったのが、栗田さんが言及してくださった「エピソード」の「補記」の文章なのです。ここを書き終えたことで、そのときは少し吹っ切れた自分がいたことを今でも覚えています。大学図書館に『経済学の冒険』が所蔵されるならば、他界した父も私の本とともに生き続けることになるのではないでしょう。少なくとも私はそう信じます。この箇所をあえて書評のなかで触れていたいただいた栗田さんに感謝したいと思います。

(2) 岩井先生の『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』(東洋経済新報社、二〇二〇年)については、刊行後すぐに「週刊読書人」で書評したのですが、昨年二〇二三年の春学期「経済学史」を講義しているとき、「本書をふまえてもう一度、論評ないしは論考を書く必要があるのではないか」とふと思いつき、夏季休暇に入ってから、その作業に取り組みました。完成後、本稿はやはり岩井先生にじかに読んでいただけないかと考え、論考ファイルを送信したところ、その返信メールにて、岩井先生はいま美苗夫人とともにご友人に招待されてフランス滞在中で、帰国は八月下旬であることが記されていました。フランスから私に丁寧な返信メールをくださったこと自体が嬉しく、私は、また後日あらためてお送りすることにしました。そして一〇月になって、「ようやく塚本さんの論考を読むことができました」という文面とともに、岩井先生の感想とコメントが述べられていたのです。二万字を超える論考ですから、私自身が送付に躊躇したのは当然ですが、それでもなお時間をたっぷり読んでコメントをしてくださった岩井先生のご好意には本当に深い感銘を覚えました。それからほんのしばらくして、各新聞紙面で岩井克人先生が二〇二三年の文化勲章を受章される旨、知ることとなりました。

(3) 岩井克人他『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』(東洋経済新報社、二〇二〇年)、一四二頁。

(4) 岩井先生は、『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』(東洋経済新報社、二〇二〇年)のなかで、こう述べておられます。ハイエクは一九七六年に『貨幣発行自由化論』という書物を出版しているのですが、「だが、不幸にして、ハイエクの自由放

任主義は理論的な誤謬であり、さらに貨幣発行自由化論は百害あって一利なしの主張だとも思っているのです」(六〇—六二頁)。それに対して西部先生は、ハイエクの『貨幣発行自由化論』を『貨幣の脱国営化論』へと邦訳を変更したうえで、『脱国家通貨の時代』(秀和システム、二〇二二年)において、ハイエクが重要視した「貨幣の質をめぐる独占的競争が、消費者により良い品質の商品だけでなく、より良い品質の貨幣を選択する自由を与えてくれるのです」(三四〇頁)と主張し、みずからの貨幣の多様性論についての理論的根拠をハイエクのそれに求めているのです。

「関連文献」

- 塚本恭章 [2023 a] 『経済学の冒険——ブックレビュー&ガイド100』読書人。
- 塚本恭章 [2023 b] 書評(読後感)・岩井克人『マンガ会社はこれからどうなるのか』平凡社、二〇二三年三月。『会社はこれからどうなるのか』はどうなるのか』『情況』情況出版、二〇二三年八月、第六期一巻第三号、二七一—三頁。
- 水野和夫・吉川洋・塚本恭章 [2023 c] 『経済学の冒険 ブックレビュー&ガイド100』(読書人)刊行を機に「資本主義／経済学は何処へ向かうのか」(水野和夫・塚本恭章対談)、『経済学』ではなく『経済学』を——吉川洋氏に聞く——」(吉川洋・塚本恭章対談)週刊読書人、二〇二三年一月二十四日、第三五一—六号一・二面。
- 塚本恭章 [2023 d] 回顧・動向「経済学」(二〇二三年)『記録』と『記憶』から経済学史を紡ぐ——経済学を学ぶ若い世代へのメッセージ』週刊読書人、年末回顧総特集号、二〇二三年二月二日、第三五二—八号八面。
- 塚本恭章 [2024 a] 書評・伊藤誠『資本論』と現代世界——マルクス理論家の追憶から』青土社、二〇二三年九月。「マルクス理論家の〈追憶〉を引き継ぐために——経済学の〈危機〉と〈再生〉を問い直す」週刊読書人、二〇二四年一月二六日、第三五二—四号四面。
- 塚本恭章 [2024 b] 『経済学の冒険』のダイナミズム——何を語り、どこを目指すか』『経営総合科学』神頭広好所長退職記念号』(愛知大学経営総合科学研究所)、第二二〇号、二〇二四年、四〇二—四三〇頁。
- 塚本恭章 [2024 c] 「欲望の貨幣論と人間論が突きつけるもの——『経済学史』は何を語り直すべきか——」『経営総合科学』神頭広好所長退職記念号』(愛知大学経営総合科学研究所)、第二二〇号、二〇二四年、三四三—三六八頁。
- 塚本恭章 [2024 d] 「岩井「経済学の宇宙」に惹かれて——思考し続ける経済学者の姿」週刊読書人、二〇二四年三月二九日、第三五三—三六号八面。
- 塚本恭章 [2024 e] 「伊藤誠『資本論』と現代世界』を読む——マルクス理論家の〈追憶〉に思いを馳せて——」『科学的社会主義』

『経済学の冒険』の〈記録〉が〈記憶〉されるために

(社会主義協会) 二〇二四年五月号、七七―八七頁。
吉川洋・塚本恭章「『2024』 『経済学』に陥った現代経済学の隘路、経済学は再生できるか」『経営総合科学…神頭広好所長退職記念号』(愛知大学経営総合科学研究所)、第一二〇号、二〇二四年、三六九―四〇〇頁。